

## 現代語訳を活用した 古典の授業



横浜国立大学助教

高木 たかぎ

まこと

数年前、ケネス・パトラー氏（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター長）が、読売新聞夕刊（一九九九年九月）に次のような提言をしていました。

日本の高校では文語体の文章は教えられているが、それは入試のために古典に親しむためではない。現代化した国々の中で日本だけが一四〇〇年以上の継続した文化をもっていることは、世界にとっても重要な「伝統」といえる。かつてエール大学で、「英訳」で日本の古典を教えたときには、「日本語の美しさそのもの」を味わわせられなかったが、「内容の理解と鑑賞に重点を置くことができ」、学生の「日本観」が変わった。日本の高校でも「文語体の教え方を改めて」、「内容の理解と鑑賞に重点」をおけば、日本の学生の「日本観」も変わるのではないか。

氏は自身の体験から、日本の古典教育も現代語訳を活

め的手段です。ですから時間がなければ活動にこだわらず、もつとほかの方法で「考えさせる」授業をすればよいと思います。例えば『平家物語』では文体・リズムの学習も重要ですが、「扇的」などを今の感覚で読むと、戦争しているのに妙にのんびりしたことをやっている。そんな違和感をすくい上げていくと、古典の世界について考えるきっかけが得られるはず。

現代語訳には漫画も含めてよいでしょう。周知のように、『源氏物語の漫画版』あさきゆめみし』（講談社）は、高校でもよく活用されています。でもそこで大切なことは生徒に言葉について考えさせることです。『あさきゆめみし』はよくできた作品ですが、それでも例えば六条 御息所のイメージは一面的です。そこで生徒に原文を読ませてみると六条御息所の複雑な思いやそれを表現している原文の力に驚きます。そのように漫画と原文とを効果的に使って言葉、そして人物について考えさせることが大切です。中学校で言えば、『項羽』（史記）などの学習にも応用できるのではないのでしょうか。

一方、生徒に作品を漫画化させると、彼らが意外な思い込みや勘違いをしていることがわかります。中国の大河が小川であったり、場面のとらえ方が違ったり。そういう思い込みなどを出発点として原文に帰るとよい

用した方が、古典への興味と理解がより深まるはずだと提言しています。実はかつて作家の中村真一郎氏も有名な『王朝文学論』の中で、物語や小説には読む速度が必要で、古典も現代語訳でまず読むべきだ、と述べています。その点、今日の中学校の教科書でも現代語訳が多く掲載されるようになり、よい試みだと思います。しかしその活用法については、単なる補助としてではない、もう少し積極的な生かし方を考えてみるべきだと考えます。以下、時間削減の中、どのような古典の学習指導法があるのか、現代語訳の活用を中心に考えてみます。

学習指導要領は文学史を通史的には扱わないよう求めています。原則的には私も賛成ですが、例えば芭蕉の『おくのほそ道』などは長い文学的伝統の上に成立していることを抜きにその魅力を伝えることは難しいと思います。だとすれば、作品の魅力に触れる上で不可欠な知識などは先生がプリントにまとめて配布してしまうことも必要でしょう。残念ながら、授業時間内の懇切な解説や生徒の調べ学習などの時間はありませんから。

ではどういつことに時間をさくべきでしょうか。結論を先に言うなら、現代語訳をほとんど使って学習者に「考えさせること」だと思います。教科書には種々の活動が示されていますが、それらは学習者に考えさせるた

言葉の学習ができます。また定家の「見たせば花もみぢもなかりけり……」は絵に描けないことに気づくだけでも価値がありますが、そこから「けり」の働きについて考えさせることもできるでしょう。必然性のある場面では文法的な学習にも、生徒は興味をもつようです。

絵本の利用という方法もあります。例えば絵本でかくや姫のお話に親しんだ生徒たちは竹の中にしたのは「赤ちゃん」だと思っ込んでいるかもしれせん。絵本にはそういうのもあるはず。でも『竹取物語絵巻』などを見ると赤ちゃんではなく小さな「人」が描かれています。そこで原文にもどると、「三寸ばかりなる人」が「つくしうてあたり」とあります。座っていたのだから赤ちゃんではない、ということになります。つまり絵本での記憶と絵巻とを比べることから、言葉の学習、そして古典の世界を開くことができるのです。

「原文」といっても、句読点や段落などが施され、表記も改められており、すでに真の意味での原文ではありません。そんな「原文」にこだわりすぎて、古典学習の入り口で、学習者を挫折させてしまっはしかたありません。それよりも、大胆に現代語訳などを活用して「考えさせる」授業を展開したいものです。現代語訳なども使用し方次第では、文語の学習に十分展開させるのです。